

特集

平和を守るボランティア

語り継ぐボランティアたち

～未来の子どもたちのために～

戦争・被爆体験や自然災害による被災体験、公害による被害体験の風化が懸念されており、あらためて日常の暮らしにおける「平和」の大切さを認識する必要がある。実体験を語ることでできる人が確実に減っていきなから、次の世代でどのように継承していくべきか。被爆体験や被災体験などを語り継ぐボランティア活動に触れ、その手法や課題について考える。



事例 1

「被爆体験記」や「原爆詩」を朗読する

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
「被爆体験記朗読ボランティア」

私たちは国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアに登録しています。この追悼祈念館は、平成 14 (2002) 年に建てられたのですが、毎年、平和式典で慰霊碑が映るのをご存知でしょうか。そのすぐ横にあるのが追悼祈念館です。

この追悼祈念館の大きな役割は、原爆を体験して、その気持ちを心のなかにしまっておくことができない方々からお寄せいただいた 13 万点の「体験記」、「原爆」について書かれた「詩」を納めていることです。そのなかには、被爆された方々の辛い体験とともに、こういう体験を二度と再び、広島、長崎以外の人びとに味わってほしくない。そういう思いが切々と込められています。

その願いをしまい込んでおくことはできない、これが私たち共通の朗読ボランティアの思いです。いろいろな伝え方がありますが、私たちは「体験記」や「原爆詩」を朗読する



「被爆体験記」と「原爆詩」を朗読する清水さん(左)と河合さん(右)

ことで、未来の人びとまで語り継ぐ、つないでいく活動を続けていきたいと思っています。

伊藤 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館「被爆体験記朗読ボランティア」の一人として、お話をさせていただきます。



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
「被爆体験記朗読ボランティア」
いとう たかひろ
伊藤 隆弘 さん

私たちの役割は、祈念館を訪れる全国からの修学旅行の生徒、小学校、中学校、高等学校、あるいは一般の方々に向けて、「被爆体験記」を朗読することです。

活動のきっかけとなったのは、平成 16 (2004) 年 8 月 6 日の平和記念式典で、秋葉忠利市長の平和宣言でした。

そのなかで、記憶の継承とともに、「体験記」のプロジェクトの展開を打ち出されました。「この一年間、世界の子どもたちに大人の世代が被爆体験記を読み語るプロジェクトを展開する」という提案でした。それを、祈念館のほうで受けて、約 13 万点の「被爆体験記」や「原爆詩」をピックアップしながら、特に若い世代に伝えていこうと、被爆者の方々が語り部として被爆の話をされるのと併行して、被爆体験記を朗読することで伝えています。

祈念館に登録している朗読ボランティアは 41 名で、そのうちの 18 名が被爆体験者です。

平成 17 (2005) 年から活動を始めて、平成 19 (2007) 年には、年間 163 回の朗読会を催すことができました。その後も年におよそ 150 回前後、続けてやっています。さらに、市内の小学校、中学校、あるいは、公民館へ行って「被爆体験記」の朗読もしています。

また、他県を巡回し、広島市主催の「広島原爆展」を開催する際には、語り部として体験の話をする被爆者の方と一緒に、朗読ボランティアも出かけて行って、「被爆体験記」

や「原爆詩」を朗読し、原爆を体験した人たちの思いを伝えています。

Q. 「自己満足になるのではないか」という指摘について、どう思われますか？

伊藤 「戦争の語り部をしているが、よくそれは自己満足ではないかと指摘されるけれど、朗読する立場からはどう思われますか」というご質問でしたが、語る側あるいは朗読する側と、聞く側受け取る側とのコミュニケーションをどのように図るかということだと思います。特に、世代の離れた小・中学生に対してわれわれの側では周知のこととして朗読したり話したりしても、なかなか理解されません。対象とする方々といかに目線を合わせるか、同じ目線になっていかに朗読するかという努力をしなければならないと考えます。そのためにも新しい朗読資料をどんどん発掘すべきですし、「原爆詩」などはできるだけ一緒に朗読する配慮が大切だろうと思います。



「被爆者の体験とともに、われわれ朗読ボランティアにより語り継いでいます」



事例2

被爆孤児となった 子どもたちのことを語る

広島平和記念資料館ヒロシマピースボランティア

川本 私は、原爆投下後、学童疎開先から広島^{にゅうし}に入市した、いわゆる「入市被爆者」として、現在、広島平和資料館ヒロシマピースボランティアの活動にかかわっています。

昭和20(1945)年当時、広島市には36の小学校がありました。8月6日の原爆投下時、広島市内にいた小学生は、1年生、2年生が約6,000人で、3年生から6年生の約8,700人は、50km以上離れた地域に疎開していました。

被爆した1年生、2年生のうち、2,000人はその日に亡くなって、その後、さらに2,000人が亡くなりました。そ

うしたことは65年経ったいまでも、資料館に來れば、記録が残っています。しかし、疎開していた8,700人の子どもたちは、被爆していないので、資料館の記録に残っていません。家を失い、家族を失った「被爆孤児」たちです。「2,000人から6,000人の孤児が出たけど、行方不明」。ただ、それだけです。

あとき、被爆はしなかったけど、生きられなかった子どもたち、8,700人のうち、6,000人は親戚に引き取られました。そして、家族の誰かが助かりました。だけど、2,700人あまりが、ひとりぼっちになったのです。何もない焼け野原で、みんな夏服しか持っていないのです。そんな状況で、2,700人の子どもたちの路上生活が始まるのです。

原爆の悲惨さは伝わっていて、原爆をなくそうという運動も盛んです。しかし、あときの「被爆孤児」たちのことは、誰も話しません。話そうとしないのです。だから、私がここで、そういった孤児たちもいたのだということを伝えています。いまの子どもたちには、二度とそういった辛い思いをしてもらいたくない。原爆での犠牲は、直接被爆だけではないということを知ってもらいたいと思っています。

私は10年しか家族といっしょに生活できなかったけど、その10年で私の身体に残ったのは、「嘘はつくな、人を傷つけるな、弱者いじめをするな」という母の教えです。そして学校では、友達を大切にする、約束を守ることを学んだのです。だから、これからのお母さん方にも、これから子どもたちにも、もっともっと友達の輪を広げていってほしいと思います。それと同時に、いま食べることのできる幸せ、学べることの幸せということ、ほんとうの意味での教育のあり方というものを教えてほしい。私はそれを願って、いまこうして、みなさん方とお話ができることに感謝しております。



広島平和記念資料館
ヒロシマピース
ボランティア
かわもとしようぞう
川本省三さん

Q. ボランティアの役割とは？

川本 私が見て知っていることを、子どもたちに正確に伝えていくことが、私にとっての仕事だと思っています。

子どもたちには、ショックな写真が多過ぎるので、見たくないといって泣き出す子もいます。そうした子どもたちに、こうした悲惨なことが二度と起こらないようにするためには、辛いだろけど、しっかり見てください、と伝えています。



※事例1・2は第19回全国ボランティアフェスティバルひろしま 分科会20より

事例3

東京大空襲の記録とともに、平和の尊さを伝える

東京空襲犠牲者遺族会 [東京都墨田区]

<http://www.geocities.jp/jisedainitakusu/index.html>

「東京空襲犠牲者遺族会」は、平成7(1995)年5月、墨田区の空襲戦跡の調査をきっかけに立ち上げられた「東京空襲犠牲者の氏名を記録する会」の運動に協力してきた人たちが中心となり、平成13(2001)年3月に結成されたボランティア団体である。会員は現在700名を超えている。

遺族会の取り組みは、ボランティアによる東京空襲被害者の氏名記録運動がメインであるが、戦争体験を語り継ぐための活動にも力を入れている。活動を支えているボランティアは現在約30名、最高齢者が85歳、最年少者が64歳で、それぞれが空襲被災体験をもつ遺族である。

● 空襲被災体験を語りあう「地域別遺族交流会」

遺族会では、空襲犠牲者の氏名を記録する活動の過程で、現在までに都内12地区で「地域別遺族交流会」を開催した。会員の呼び掛けによって集まった各地域の人びとが、互いの空襲被災体験を語りあうなかで、交流を深める機会を提供している。こうした場で紹介された体験談のうち、重要と思われるものについては、詳しい戦跡調査を行うこともある。

これらの機会をとおして、自分の体験を語れるようになった人、体験を「絵」にまとめた人などが「語り部」となって活動をしているほか、みんなの記憶をつなぎ合わせて、戦前のまちの復元地図の作成にも取り組んでいる。

交流会の実施によって、50年来、音信不通であった幼なじみどうしが再会したり、捜し求めていた恩人の消息が分かるなど、感動的な場面も生まれるという。

● 「戦争遺跡めぐり」で平和の尊さを語り継ぐ

墨田区内を流れる大横川に沿った地域は、空襲による犠



友人・知人が集い、体験談を交換する「地域別遺族交流会」



空襲犠牲者の追悼のために建てられた地蔵・慰霊碑等を訪ねる「遺跡めぐり」

牲者が最も多く出たところであり、周辺に建立された地蔵尊や供養塔の一つ一つを、徒歩や車で巡るツアー「戦争遺跡めぐり」も企画・実施されている。

この取り組みは、空襲のことを知りたいと遺族会に問い合わせる市民グループや、地方から東京への修学旅行でやってくる小・中学生、学校の平和学習の一環として東京大空襲を学ぶ子どもたちを対象に行われる。

東京大空襲の犠牲となった身元不明の遺骨が納められている「東京都慰霊堂」(墨田区横綱)や、空襲の惨状を次世代に語り継ぐ目的で開設された「東京大空襲・戦災資料センター」(江東区北砂)といった施設をはじめ、墨田区内の地域に点在する戦争遺跡をボランティアたちがガイドをしながら、空襲被災体験を語り継いでいる。

特に、子どもたちにとっては、実体験としての感覚が伴わないため、ツアーの前には、被災者の体験談とともに、実写映像やアニメ映像とをセットにして空襲の状況を紹介する時間を設ける場合もあり、伝承の方法にも工夫を凝らしている。

● 活動の担い手の発掘に向けて

遺族会にとっては、東京大空襲の被害と戦争の悲惨さを風化させず、次代に語り継ぐための新たな担い手の確保が課題である。

会との出会いをきっかけに、東京の防災問題や空襲研究の第一人者となった研究者、卒業論文のテーマとして東京大空襲を学んだ大学生たち、空襲問題をテーマに活動を行っているプロカメラマン、高校時代のサークル活動が母体となって平和活動団体に発展し、現在もネットワークをつくりながら、活動を広げているなど、若手の後継者たちも育ってきた。

毎年1回、東京都原爆被害者団体協議会(東友会)、市民グループ「和・ピースリング」との共同で、全国の空襲被害者がつながって被害者救済の法律の制定を求める「浅草ウォーク」は、今年で5回を数える。

さらに、本年8月14日に「全国空襲被害者連絡協議会」(全国空襲連)という全国組織が発足した。これらを契機に、戦争被災体験を語り継ぐことで、平和を守る活動の輪を全国に広めたいと願っている。



東京空襲犠牲者遺族会 会長
ほしの ひろし
星野 弘 さん



▲ 崇徳高等学校グリークラブ、フェミニンコール広島、広島ジュニアコーラス、女声コーラス「ポコアポコ」によるオープニングアクト

式典 9/25

メイン会場となった広島国際会議場フェニックスホールでは、午後1時より、主催者挨拶や来賓祝辞、開催地からの挨拶、ボランティア功労者への厚生労働大臣表彰などが挙行されました。



◀ ボランティア功労者による受賞の挨拶

テーマトーク 9/25

少子高齢化の進行や人口減少、中高年齢者の孤立・自殺の増加、若い世代の地域ばなれ、地域の崩壊等、さまざまな社会問題の解決のために、ボランティア・市民活動をおこし、活動をつなぎ、後継者へ伝え、新しいチカラ(民力)を築いていく必要性について、議論を深めました。

テーマ 民力による社会問題への挑戦
パネリスト

清水康之氏(NPO法人 自殺対策支援センター ライフリンク 代表)
藤井絢子氏(NPO法人 菜の花プロジェクトネットワーク 代表)

コーディネーター

市川一宏氏(ルーテル学院大学 学長)

達人と歩く「ひろしま」ミニツアー 9/25

広島の魅力を知ってもらい、参加者どうしの交流を深めるために、「碑めぐりツアー」「被爆樹木と公園内の記念樹めぐりツアー」「原爆からの復興…広島カープと市民球場ツアー」「広島平和記念資料館見学」「川から見る広島/遊覧船パールの広島案内ツアー」が実施されました。



▲ 「被爆樹木と公園内の記念樹めぐりツアー」

つながりコンサート 9/25

「ピースワード」でつくったテーマソングや子どもたちの合唱が、平和記念公園内で行われました。

ピースキャンドル 9/25

ピースキャンドルグラスに火を灯し、平和の願いや日々の暮らしの、“平和”の大切さを発信しました。

フェスティバルの2日目には、広島市内及び近隣地域の7会場に分かれて、「話し合うコース」「体感コース」「学ぶコース」の分類による22の分科会が開催され、各会場では活発な議論や意見交換が展開されました。

分科会 9/26

前日のテーマトークや分科会の内容を踏まえ、活動を「おこす」「つなぐ」「伝える」などのキーワードから論点を振り返り、活動分野を越えたつながりから生まれるボランティア・市民活動の可能性を探りました。

リレートーク 9/26

第19回全国ボランティアフェスティバルひろしま
平成22年9月25日(土)・26日(日)
**つながる民力
いかしあう民力**

開催ダイジェスト

テーマ 広島から新しい民力の発信
パネリスト

上田正之氏(庄原市社会福祉協議会 総合センター長)

中村隆行氏(NPO法人 ひろしまNPOセンター センター長・副代表理事)

松浦真英氏(NPO法人 かみじまの風 理事長)

渡部朋子氏(NPO法人 ANT-Hiroshima 代表理事)

コーディネーター

田尻佳史氏(NPO法人 日本NPOセンター 常務理事・事務局長)



▶ 「来年は東京で会いましょう」と、大会フラッグの引き継ぎ

引継式・閉会式 9/26

来年開催される東京大会の枝見太郎実行委員長へ、しっかりと大会フラッグが引き継がれ、2日間のフェスティバルは幕を閉じました。



ブースでセッション 9/25・26

▲ 来年の東京大会 PR ブースでの「紙相撲大会」

2日間にわたって、ボランティア・市民活動団体のブースを出展し、活動紹介や情報交換が行われました。

「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」は、平成23(2011)年11月12日(土)・13日(日)、両国国技館にて開催いたします。詳しくはホームページをご覧ください。

…………… > <http://volunteerfestival.jp/>